”ふれあいの赤いエプロンプロジェクト”の展開によるコミュニティレジリエンスの回復～男の料理教室:岩手県陸前高田市の1事例

久地井寿哉 [1] 黒田藍 [1) 2)] 伊藤常久 [1) 3)] 木下ゆり [1) 4)]
伊東尚美 [1) 5)] 佐藤香菜子 [1) 6)] 福田吉治 [1) 2)]

1) ふれあいの赤いエプロンプロジェクト評価チーム
2) 帝京大学大学院公衆衛生学研究科
3) 東北生活文化大学 4) 東北生活文化大学短期大学部
5) 福島県立医科大学医学部 6) 中京学院大学短期大学部

【目的】

- 2011年の東日本大震災後、被災者の食生活の改善とコミュニティ再生・活性化を目的に、味の素グループと公益財団法人味の素ファンデーション（TAF）は、東北3県（岩手・宮城・福島）で「ふれあいの赤いエプロンプロジェクト」を展開した。

- その好事例として、仮設住宅で孤立しがちな男性を対象にした「男の料理教室」を通じた岩手県陸前高田市の取り組みを報告する。

【方法】

- 被災当事者2名と現地スタッフ1名に対し、2022年11月にフォーカスグループインタビューを実施し、事前情報とあわせてプロジェクト展開の実際をまとめた。

【結果】（１） 背景

陸前高田市の壊滅的な被害

- 陸前高田市の市街地は津波で壊滅し、約2000人が犠牲となった。

・先行研究によると、地震や津波は、震災後にPTSD、うつなど心理的な影響が幅広く発生する（Bryant,R(2009）,Fergusson,D.M(2014),Gaela,S（2005）

【結果】(2) 地域への介入方法

震災直後の状況

- 陸前高田市では、震災により市職員の多くが犠牲になり、機能が不十分な状態であった。
- 味の素が支援に来たが、どう協力していいかわからない状況だった。

→震災後の陸前高田市における市の機能不全と
　支援活動の困難さがあった。

【結果】（２） 地域への介入方法

モビリア仮設住宅での支援開始

- 市内最大規模のモビリア仮設住宅で、味の素と共に支援を始めた。
  年間350日間のイベントをコーディネート。

- オートキャンプ場モビリア　について
  - 民間のキャンプ場内に臨時の避難所が開設された
  - 最大で168世帯308人が避難

【結果】（2） 地域への介入方法

「男の料理教室」の始まり

- 2011年に郷土料理やそば打ちイベントを行ったが、主に女性や高齢者が参加。2012年から男性を対象に「男の料理教室」と名付け、ビールを提供しながら開催。

- *「Mさん（味の素の支援者）が来た時に、彼は料理全然わかんない、道具持ってきた、どうやるんですかってみんな思っている、誰も何もいわないし。しょうがねーなってことになり、テレビでよくみるように、そばうちをした。（中略）ばーさんがよく手打ちのうどんつくってたから、のして切って、そばうったら、みんなに食わした。」（被災当事者A）*

【結果】（2） 地域への介入方法

「壁」の存在：

- 震災で「家を流された人」と「流されない人」の間に壁が生じ、2013年頃から再建の進捗で経済的な壁も形成された。
- 男性の孤立化の課題も顕在化してきた。

- *「仮設の人だけだから行きたいけど行けなかったという人もいた。男でもだんだん来なくなる人もいるから、男にしたのかな、来なくなるのが男性。モノづくり、刺繍など、そういうと男は来なくなる。」（被災当事者A）*

【結果】(2) 地域への介入方法

八起プロジェクトの始動

- 2014年に経済的な壁をなくすため、仮設住宅からコミュニティセンターに移り、料理教室を地域で開催するようになった。
- 「味な男の料理番」と名付け、おそろいのエプロンを作成。

参加促進の工夫について

- 仮設住宅の中での声掛け：チラシを作成し、避難所で回覧
- コミュニティセンターへの移行後は、募集エリアを広げ、回覧板を使った告知。

  →地域住民の方も参加するようになった。

評価

- 料理教室は男性同士のつながりや気分転換の場として機能し、コミュニティの拠点となった。
- TAFと住民と協働による活動は2012年4月～2020年2月。活動頻度は月1回。
- 料理自体よりも仲間の集まりと支え合いが強調され、健康面での食習慣改善にも貢献した。
- その後自主開催に移行しTAFが後方支援を行った。現在でも活動が継続（活動頻度は2ヶ月に1回）されている。

【考察】 支援課題と成果

- コミュニティ課題：地域の経済的格差による分断、男性の孤立化
- 男性限定の料理教室開催を通じ、住民の支援やコミュニティの再建に取り組み、一定の成果を上げた。

- *1回目から参加している。実は震災当時東京にいたので、家は流れたけど、被災者より支援者として毎週末来ていた。誰も参加しなかったら、支援に来た人たちに失礼になるから、みんなを引っ張り出す役割をしていた。自分も出るようにしていたので、巻き込めたと思う。（被災当事者A）*
- *面白いですよ、男、イキだなと思った、楽しいですよ、そりゃ、上手ですね上手ですねと言われる、3センチに切って下さいと言われて切っても5センチだといわれるけど、いいんだ俺は、楽しければと。（被災当事者B）*

【考察】プロジェクトを継続できた理由

- 先を見据えた計画と情熱
- 定期的なイベントを月の第3週の日曜日に固定
- スタッフが一軒一軒訪ねて参加を促す
- 減塩などの健康意識を高めるための知識提供も徹底した
- ソーシャルサポートネットワークの創出
  - 料理教室は料理そのものだけでなく、男性同士のつながりや参加者間の支え合いが重要であると強調されていた。
  - 支援者への感謝、復興への想いや自立的な活動への意欲が共有された、
- これらの一連の取り組みにより、料理教室は単なる料理指導にとどまらず、コミュニティ形成の場として機能し、コミュニティのレジリエンスが回復したと考えられる。